

西宮文学案内
第3回「村上春樹と阪神間の音楽文化」

日時：2011年11月26日（土）14時から
場所：西宮市立中央図書館
講師：土居豊氏（作家・文芸レクチャー）

皆さん、こんにちは。よろしくお願いいたします。

ラジオカセットで音楽を流すという原始的な感じでいきなり始めさせていただきました。ちょっとまぬけな話で申し訳ございません。こちらの会場は、ご覧のようにものすごく立派なオーディオ装置が付いていて、普段は映画上映をされていてとても機材が充実しています。今日かける予定のCDは、実はいろんなCDからパソコンに曲を集めて、かける順番に並べたデータをCDにコピーしたのですが、ここへ来て流そうとしたら、いきなりディスクエラーになりました。いい音で聞ける機械では、なぜかかけられないのに、ラジオカセットではかけられるんです。どうなっているのかなと思います。だいたいCDは著作権がうるさいので、ディスクコピーしたものはいかんということで、はじくようになっているのかなと思ったりします。よく分かりませんが、いきなりラジオカセットの音楽を流し始めていました。

今日は西宮文学案内の第3回村上春樹と阪神間の音楽文化ということでお話しさせていただきます。ちょっと暗くしていますが、画面が見えるように、このぐらいの明るさで行います。開場5分前ぐらいからじゃんじゃか鳴っていたのが、いまスクリーンに出しているレオシュ・ヤナーチェク作曲『シンフォニエッタ』という曲です。

（音楽）

曲名：レオシュ・ヤナーチェク作曲『シンフォニエッタ』
演奏：ラファエル・クーベリック指揮 バイエルン放送交響楽団

そのあと室内楽が始まりましたが、ベートーベンの『大公トリオ』というピアノ三重奏曲です。

（音楽）

曲名：ベートーベン作曲『ピアノ三重奏曲第7番「大公」』
演奏：アルトゥール・ルービンシュタイン(ピアノ)、ヤッシャ・ハイフェッツ(ヴァイオリン)、エマニュエル・フォイアマン(チェロ)

2曲とも村上春樹の読者の方であれば作品のなかに登場した音楽ということで、おそら

く曲名をご存知だったのではないかなと思います。ということで、ラジカセは止めます。

今日は、村上春樹と音楽の話、そして阪神間文化の話ということで、できるだけ実際に音楽をお聴かせしながら、作品にどのように描かれているかということとうまく話をつなげていきたいと思っています。

前の画面に映しているのは、村上春樹の『ノルウェイの森』のセットです。去年映画化された村上春樹の『ノルウェイの森』をご覧になられた方は、

どのぐらいいらっしゃいますか？

けっこう

ご覧になっていないですね。村上春樹の『ノルウェイの森』をまだ読んでいなくて映画を見てみようかなとか、あるいは読んでから見てみようかなという方は、もう DVD が発売されて TSUTAYA で多分レンタルできると思います。買えとは言いませんので、TSUTAYA でレンタルして見てみてください。映画の『ノルウェイの森』と原作とを比べていろいろ突っ込みを入れるのは、なかなか楽しい味わい方ではないかなと思います。

昨年、村上春樹といえば、『ノルウェイの森』の映画化でずいぶん話題になりました。ちなみに、右側にこっそり並べていただいているのが私の本です。『村上春樹を読むヒント』という、ぱくりみたいなパッケージになっていますが、私も村上春樹のいろんな研究をしているなかでこういった本を書かせていただいています。

村上春樹と音楽というくくりで、いろんなところでお話をさせていただいていますが、村上春樹の『1Q84』を読まれた方は、どのぐらい

いらっしゃいますか？

『1Q84』はものすごいブームになりましたが、こちらはかなりいらっしゃいますね。ありがとうございます。村上春樹の『1Q84』はなんとミリオンセラーを記録して、ものすごいブームになっております。このあいだ、英語版がロンドン、ニューヨークで発売になって、そのニュースをご覧になった方もおられるかもしれませんね。村上春樹のいまもっとも新しい代表作が、この『1Q84』です。

『1Q84』の話の最初に出てくる曲が、最初にラジオカセットで流しておりましたヤナーチェクの『シンフォニエッタ』という曲です。お読みになったら最初に出てくるので、僕は最初のところをもう一度ぜひ読んでいただきたいなと思います。

下にちらっと写真を出していますが、面白いことにこれは CD ショップの写真です。『1Q84』が写っていますね。CD ショップだけれど『1Q84』の本を売りながら、その下に CD が並んでいます。つまり『1Q84』に出てきた『シンフォニエッタ』は、これですとい

う感じで売っているわけです。去年『1Q84』がブームになっていた頃は、いろんな CD ショップでこういう売り方をして話題をうまく利用していました。

これには実は理由があるんですね。『1Q84』に出てきた曲ということで、あまり知られていなかったこのヤナーチェクというチェコスロバキアの作曲家の CD が、突然売れ出しました。

CD ショップには、それまで在庫がほとんどなくて、置いていてもせいぜい1枚、2枚。マイナーでほとんど売れないような曲でした。それが突然買いにきて、あっという間に売り切れてしまったわけです。何が起こったんだということで、よくよく聞いてみると、村上春樹の新作に出てきたんだということだったので、早速あやかり商法をしたというわけです。小説に書いた曲が、CD でも売れてしまうという恐るべき影響力を村上春樹は持っているということです。

ちなみに、『海辺のカフカ』という小説は、『1Q84』の前の代表的な長編ですが、その『海辺のカフカ』のなかに、ベートーベンの『大公トリオ』が出てきます。『海辺のカフカ』の場合は、『1Q84』ほどのブームにはなりませんでしたが、それでも『海辺のカフカ』のなかにベートーベンの『大公トリオ』が出てくるというので、CD を買いにくる人がいます。それをねらって CD ショップもベートーベンの『大公トリオ』をずらっと並べたわけです。そういうわけで、先ほどラジオカセットで、ベートーベンの『大公トリオ』という曲をお聴かせいたしました。

先ほどお聴かせしたヤナーチェクの『シンフォニエッタ』という曲は、ラジオカセットであまりいい音でなくて申し訳なかったんですが、いろんな演奏の CD がすでに出ております。例えば、小説のなかにも演奏が二種類出てきます。そのあたり、村上春樹の小説を読むときの楽しみ方の一つでもあります。村上春樹という人は、出てくる題材にもものすごく凝って詳しく書く人ですね。音楽に関しても詳しくて、とうとうとうんちく垂れるというほどではないのですが、さりげなく玄人好みのすごく詳しい知識がちょこちょこ書かれています。

ヤナーチェクの『シンフォニエッタ』という曲一つをとっても、小説『1Q84』のなかでは三通りの書き方がされています。僕も音楽が好きなので、それを読んで非常に喜んでるわけです。

最初に青豆というヒロインが、『1Q84』の世界に入ってしまうきっかけになる曲が、タクシーの中で聴いた『シンフォニエッタ』でした。それはライブ収録なんです。FM ラジオからライブで流れてくる『シンフォニエッタ』だったんです。

そのあと、青豆はその曲が気になってレコードを買います。ちなみに、『1Q84』という小説の舞台は、西暦でいうと 1984 年という年になっています。1984 年はまだ LP レコードの方が多かったといいますが、CD がいまみたいに幅を利かせる前だったので、LP レコードを買うということになっています。ジョージ・セル指揮クリーブランド管弦楽団というレコードでした。

ところが、もう一人の登場人物、のちに青豆と運命的なことになる天吾という小説家志望の男性も、偶然というか、運命的にというか、『シンフォニエッタ』のレコードを聴くわけです。それは同じレコードではなくて、また違うレコードで、小澤征爾指揮のレコードを聴いています。

もし皆さんがヤナーチェクの曲を聞いてみようととしても、『1Q84』の小説発売以前ならおそらく CD ショップに行ってもなかったかもしれないし、取り寄せないとないですねとか言われそうな感じですが、いまであれば各種取り揃えておりますということで、選り取り見取りです。逆に選ぶのが難しいぐらいです。例えば、ジョージ・セルの CD を聴くとか、あるいは小澤征爾の CD を聴く、それで多分十分だと思います。

でも、僕の個人的な好みですが、ヤナーチェクの『シンフォニエッタ』をもしこれから聞いてみようという方は、ぜひいま画面に出しておりますラファエル・クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団の CD を聴いていただきたいと思います。ヤナーチェクの『シンフォニエッタ』は、普通のベートーベンの曲などとは違ってずいぶん複雑な曲ですが、クーベリック指揮の演奏は非常に聴きやすく演奏されています。あまり抵抗なく聴くことができると思うのでお勧めしておきます。

ついでに画面に出たのがピアノトリオ、『大公トリオ』というのはベートーベンの『ピアノトリオ第7番』になります。『海辺のカフカ』のなかには、ルービンシュタイン、ハイフェッツ、フォイアマンというこの三人が演奏したものが登場します。これももし聴いてみようかなという方は、有名なアルバムですので CD ショップに行くと必ずあると思います。

村上春樹がいかにも音楽に詳しくて、小説にいろいろ隠しねたとして使っていたかというお話をしましたが、次に、ではその村上春樹が音楽をどのように聞いて育ってきたか、逆に村上春樹の文学は、どういう音楽のなかから育まれてきたかという今日の本題に移りたいと思います。

いま画面に出したのは、アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズの来日公演ということでご紹介しています。概略はパンフレットに書かせていただきました。村上春樹は西宮出身で、芦屋市へ転居して、だいたい 10 代を阪神間で過ごしました。ずっと音楽が好きで、いろいろ聞いて育ってきたというのがエッセーにも書かれています。自分の体験をうまく下敷きにして初期の作品を書いたということはすぐに分かるところです。

例えば、『ノルウェイの森』という小説が一番の代表作になったりするぐらいですから、村上春樹といえばやっぱりビートルズが好きなのかな、あるいはアメリカンポップスが好きなのかなという印象があります。村上春樹さん自身もインタビューで語っていますが、実際には、モダンジャズという音楽に初めて目覚めたきっかけが、アート・ブレイキーの来日公演だったそうです。それがきっかけで、音楽をマニアックに趣味としてどんどん聴いていくようになったと語っています。このアート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズの来日公演をちょっとさわりだけ聴いていただきます。そちらの方で CD をかけていただけますか。

いまこれはこっちのスピーカーから出ているので、もし音がうるさく感じられるようでしたらおっしゃってください。

(音楽)

曲名：『キャラバン』

演奏：アート・ブレイキーアンド・ザ・ジャズ・メッセンジャーズ

フェードアウトをお願いします。

こんな感じです。いま流していたのはアート・ブレイキーアンド・ザ・ジャズ・メッセンジャーズというモダンジャズのバンドが演奏した『キャラバン』という曲です。この『キャラバン』という曲は、この来日公演とはまた違うディスクです。なぜこちらのスピーカーから流せたかという、コピーしたディスクではなくて、ちゃんと買った CD だからだと思います。

いま画面に出しているように、アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズの神戸公演を村上春樹さんは聴いたそうです。それが 1964 年です。1964 年 1 月、お正月を少し過ぎたぐらいです。村上春樹さんのなかでは、面白いことに 1964 年まではアメリカンポップスを聞いていて、1964 年にジャズに目覚めたというインタビューで言っています。なぜ 1964 年かという、アート・ブレイキーの来日公演があったからと。非常に克明な記憶というか、はっきりときっかけがあることが面白いですね。

いま画面に出したのは、インタビューの文章です。ものすごく音楽に圧倒されてということ語っています。それまでラジオでアメリカンポップスなどリクエストにかかる曲を聴いていた少年が、突然ジャズに目覚めたという体験をしました。

ところで、アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズのコンサートが 1964 年に神戸であったといいますが、これを覚えている方は

いますか？

アート・ブレイキーのコンサートがあったと。

いらっしゃいますか？

ジャズの来日コンサートというのは、まだ 1964 年のころは、あまりたくさんはありませんでした。わりと日本でジャズの来日公演が盛んになっていく一つのきっかけになったのが、このアート・ブレイキーの来日だったといわれています。これは、実は初来日ではなくて、2回目の来日になるんだそうです。初来日は 1963 年だったと思います。そのときの東京でのライブが、いろんな文化人、当時の芸術家たちに、とても大きな影響を与えたいと

いろいろなジャズの本に書かれています。

村上春樹さんは、まだ地元西宮、芦屋在住の少年でした。これは2回目のツアーで神戸に彼らがやって来たときに聴きました。でも、いまだったらなんとなく、ふうん、そうという感じで流してしまいそうですが、あの当時、アート・ブレイキーの初来日コンサートをどうやって聴いたんだろうと思います。いまだったら、レディー・ガガの来日コンサートを聴いたと中学生か高校生ぐらいの子どもが言っても、そんなに不思議でないのかもしれませんが、アート・ブレイキーの来日コンサートを聴いたということだけで大変なことです。

村上春樹は当時少年だったわけですが、どうやって聴きにいったのか、ちゃんと自分でインタビューに答えています。誕生日のプレゼント代わりにチケットを買ってもらったそうです。要するに、来日公演がある、聴きにいこうと自分のお小遣いでほしいと買えるような値段ではなかったんでしょう。誕生日のプレゼント代わりに、親にチケットを買ってもらってやっと聴けたということです。そうやって、初めてジャズの生演奏に触れたということです。

さて、これは村上春樹さんの場合とは違って、私自身の話で申し訳ありませんが、実は、偶然、僕が初めてモダンジャズの生演奏を聴いたのも、やっぱりアート・ブレイキー・アンド・ザ・ジャズ・メッセンジャーズの演奏でした。もちろん1964年のコンサートではありませんよ、僕は1964年にはまだ生まれていないので。これは本当に偶然でした。別に村上春樹の真似をしようと思ってわざわざそうしたわけではなくて、たまたまそうでした。それは、僕が高校生のときでした。1983年に来日公演があつて、いまは建て替えられましたが、大阪フェスティバルホールにライブを聴きにいきました。それは多分、誕生日のプレゼントに買ってもらったのではなかったと思います。チケットをどうやって手に入れたかは、いまいち確かではありません。

高校生のとき吹奏楽部に入っていました。皆さんのご家族、お子さんたちの中に、ブラスバンドをやっている人がいるかもしれませんが、ブラスバンドで管楽器をやっているとジャズを好んで聞くことがあります。僕はちょうどそのとき、トランペットとトロンボーンの友だち、サクスを吹いている友だち、打楽器のパーカッションの友だちと一緒に遊ぶんで遊んでいました。みんなジャズが大好きでした。

当時、何で聴いていたのかな、多分ラジカセでFM放送を主に聴いていたと思います。ジャズが大好きな友だちが周りにいて、アート・ブレイキーを聴きにいこうということになって、みんなでぞろぞろフェスティバルホールに聴きにいったことを覚えています。たまたま僕もアート・ブレイキーの生演奏を初めて聴いたので、それまでアメリカンポップスを聴いていた村上春樹が、アート・ブレイキーのジャズの演奏を聴いてぶっ飛んだという意味がよく分かります。

何がどうかというと、皆さん、モダンジャズの演奏をよくご存知かなと思いますが、先ほどの演奏も、ちょっとわあっと盛り上がりかけたところで止めましたが、あのあとアド

リブソロがずっと続きます。

詳しくはハード・バップという種類になりますが、だいたい管楽器はピアノと合わせて最初にメロディーをずっと演奏して、そのあとそれぞれの楽器のソロに移ります。さっきの演奏ではフレディ・ハバードが、トランペットのソロを演奏します。そのソロというのがアドリブソロで、メロディーなどが全然ありません。ジャズのアドリブソロは、何かでたためにドレミファを吹きまくっているような感じに聞こえてしまうようなアドリブソロが延々と続きますが、トランペットが吹き、トロンボーンが吹き、サクソが吹きと順番にあります。ピアノがソロを弾いて、ドラムソロになって、最後にもう一度メロディーがみんなで演奏されて終わります。そういう一応決まった形式があります。

そういう予備知識なしにモダンジャズのライブをいきなり聴くと、普通だったら曲というのはメロディーが続いて、最後メロディーでちゃんと終わるので、曲が途中でアドリブソロになると訳が分からなくなります。演奏者が何をやっているのかが分からない。予備知識なしに聞くとそういうことになります。おそらく、村上春樹が最初にアート・ブレイキーのライブを聴いて感じたのもそういうことではなかったのかなと思います。

ちょうど先ほど流した『キャラバン』という曲を僕自身もライブで聴きました。『キャラバン』という曲はわりと有名な曲なので、吹奏楽で『キャラバン』を吹いたこともありました。吹奏楽で吹く『キャラバン』の曲というのは、ちゃんとメロディー、メロディー、メロディー、終わりみたいな曲です。ところが、最初『キャラバン』のメロディーがあって、そのあとトランペットが突然訳の分からない音階を吹き始めて、なんじゃこれはということになったという自分の体験があって、おそらく村上春樹もぶっ飛んだというのはそういう意味じゃないのかなと思っています。それは偶然の一致で非常に面白かったわけです。

アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズが来日したときは、日本人にとっても初めての本場のモダンジャズのバンドを聴いたという貴重な出会いでした。ジャズメンたち、つまりジャズ奏者たちにとっても、幸せな日本との出会いだったようです。これは、アート・ブレイキーだけではなくて、多くのジャズメン、ジャズ奏者たちが語っていることです。

いま画面に出しているのは、アート・ブレイキーが来日したときのインタビューのコメントを収録しているものです。1960年代当時、アメリカ本国ではジャズを演奏する黒人たちは、差別の対象でした。人気のあるバンドであっても、何か抑圧を受けていました。要するに、表舞台には出てこられない社会。アメリカの黒人差別の時代でした。日本に来たらいきなりファンに取り巻かれて、上に書いてあるように記念写真を撮ってということになりました。アート・ブレイキーのバンドはみんな黒人ですが、黒人の奏者たちは、差別されない、みんながちやほやしてくれる、まるでパラダイスのような国へ来たと感じたらいいです。アメリカの黒人ジャズ奏者たちは、日本が好き人が多いみたいです。アート・ブレイキーも日本びいきで、何度も何度も来日公演をしてくれました。

これは先ほど流した CD の演奏です。1963 年のレコードですので、来日公演の 1 年前の演奏です。非常に元気のあつたころのアート・ブレイキーの演奏です。ちなみに、バンドの 5 人の名前が並んでいますが、そのなかのシダー・ウォルトンという人は、実は村上春樹さんが一番好きなピアニストなんだそうです。そう思って聞くと、先ほどの『キャラバン』の曲も、ああ、なんだかこれが村上春樹の好きなピアニストかみたいな感じで、ちょっと違って聞こえてしまって良くないかもしれませぬね。

いま画面に出しているように、村上春樹のエッセー、『意味がなければスイングはない』というちょっともじった面白いタイトルのエッセーのなかで、好きなピアニストとしてこのシダー・ウォルトンという人を挙げています。これはアート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズのなかでピアノを弾いていた人です。なぜ好きかということも語っています。これはエッセーを実際に読むと面白いかなと思います。目立たないけれども、巧みにバンド全体をうまく盛り上げていくような、要するに、脇役だけでも脇役の魅力、そういう渋いところが村上春樹の好きな理由だそうです。村上春樹が聞いたはずの 1963 年のライブでは、こういうメンツでやっています。アート・ブレイキーの話をいろいろさせていただきました。

このようなわけで村上春樹さんは、モダンジャズに目覚めますが、それまではアメリカンポップスをよくラジオで聴いていたと言っています。曲がうまく流れればいいのですが。これはご存知の方は多いと思います。

(音楽)

曲名：『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・バンド』

演奏：ビートルズ

これがいま画面に出しているビートルズの『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・バンド』という長いタイトルです。これはビートルズのなかでも『イエスタデイ』や『オブ・ラ・ディ・オブ・ラ・ダ』などの売れ筋の曲とは違って、ちょっとマニアックな雰囲気曲です。伴奏に管楽器の生バンドが入ってもものすごく凝った曲ですね。

しかし、面白いことに村上春樹さんのエッセーには、ビートルズにはまっていたわけではないと書かれているんです。村上春樹は『ノルウェイの森』というタイトルの小説を書いたということが頭にあるので、村上春樹はビートルズが大好きだったんだろうという先入観がありますが、ビートルズはそんなに熱心に聴いたわけではないそうです。これがまた面白いですね。

タイミング的に、ちょうどビートルズのレコードがどんどん出てきて、10 代の少年少女たちが一生懸命レコードを買って聴いているころには、村上春樹さんは、ビートルズではなくてモダンジャズのレコードを一生懸命買っていました。ビートルズはラジオで聴けばいいかみたいな乗りだったそうです。だから、1964 年にアート・ブレイキーに出会ってモ

ダンジャズに目覚めるまでは、ラジオでアメリカンポップスや小説にもよく出てくるビーチボーイズなど、ラジオでよくかかる曲を聴いていて、いきなりモダンジャズの方へぼんと飛んでしまったんです。ビートルズを実はそんなに熱心に聞いていたわけではないが、時代的に『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・バンド』などもちゃんと題名は小説のなかに出てきます。失礼しました、アート・ブレイキーの初来日は1963年ではなく1961年でした。

これはもう一度おさらいに聴いておいていただこうと思いましたが、アート・ブレイキーをだいぶ聞いたんで、これはスルーします。アート・ブレイキーの代表的なアルバムの一つである『ライブ・イン・ジャパン 1961』のなかに、有名な『チュニジアの夜』が入っています。これはアート・ブレイキーなのでスルーします。

村上春樹さんがジャズに目覚めたあと、引き続き凝り始めるのがクラシックです。このあたり、きっといわゆる、ませがきだったのかなという気がします。ずいぶん生意気なませたがきだったと想像します。高校生のころから自分でお小遣いを貯めて、クラシックのレコードを一生懸命集め出したそうです。そのあたりは、エッセーやインタビューのなかにも書かれています。

意外なことに、村上春樹のご両親は、音楽は特に興味はなく、家にレコードプレーヤーがありませんでした。案外そういうお家は多いのかもしれませんが。僕が小さいころは、父親がレコードプレーヤーを持っていたので、物心付いたころからレコードプレーヤーは家にありました。村上春樹の時代は、レコードプレーヤーがない時代だったんですね、きっと。

小学校のころにトランジスタラジオを買ってもらって、初めてラジオで流れる音楽を聴き始めたそうです。そのうちにレコードプレーヤーを買ってくれて、→買ってもらい、レコードを自分で買って聴くようになっていきます。ポップスはラジオで聴くからそれといいと、ジャズとクラシックはレコードを一生懸命集めて聴くということへ走りました。これは村上春樹のインタビューが収録されたものですが、当時の空気を思い出します。僕のころもそんな感じでした。

ちょっと古いレコード屋さんが、まちに1軒ぐらいはありました。いまみたいに全国チェーンのでっかいCDショップではなくて、まちにも一つちょっとマニアックな感じのおっちゃんがやっているレコード屋さんがありました。ものすごく玄人好みの、でもレコードジャケットが埃だらけで全然売れてなさそうな店でしたが、そういう店で名盤を探すことが結構楽しみだったりもしました。村上春樹の場合は、三宮の駅の高架下にマスタ名曲堂というお店があって、おそらくいまはないと思いますが、そこでいろいろ教えてもらいながらレコードを集めたそうです。

さて、村上春樹といえば、阪神間の文化ということで、そろそろ話をそちらに持っていこうと思います。西宮文学案内の企画も、西宮が生んだ世界的ノーベル賞候補作家村上春樹という乗りでやっているわけですが、今年は、長年、村上春樹の研究をさせてもらって

いる僕にちょっとうれしいことがありました。

村上春樹がノーベル文学賞を取るかどうかという10月の受賞の時期に、西宮文学案内の主催者の一人である河内厚郎さんは、毎年村上春樹ノーベル文学賞受賞に対する識者のコメントを準備するそうです。今年こそはと準備しては流れて、また来年、ということになるそうですが、河内厚郎さんも毎年何か書くということです。僕が昨年この文学案内で一緒にさせていただいた有名な内田樹さんも、毎年、幻の受賞コメントを書いています。あの人は本にそれを収録されています。

僕も今年初めて新聞社から電話がかかってくる、一応コメントをもらえませんかということだったのですが、幻の受賞コメントを初めてして、それが大変うれしかったわけです。実際に受賞してそれが載ったらうれしかったんですが、流れてしまいました。やっぱりメディアも受賞コメントを求めるときに、阪神間と村上春樹みたいな切り口でコメントを欲しがります。村上春樹の阪神間とのつながりは、いまではみんな読者は知っていると思います。

これは芦屋の風景ですが、西宮の生んだ村上春樹というところをこの文学案内では強調しなければいけないのかもしれませんが、今日は西宮ばかりではありません。僕も村上春樹研究をするなかで、阪神間とのつながりから調べ始めました。

これは村上春樹が通っていた芦屋市立精道中学校の校門です。こういうふうには地道に地元の村上春樹ゆかりの場所をチェックしながらやっていました。ちなみに、これは精道中学校の校門を写真に撮っていたんですが、いまでは中学校というのはなかなか警戒が厳しくて、写真を撮っているところへ警備員さんが近づいてきたので慌てて逃げました。ちょっと盗撮しているみたいに思われても困るので逃げました。

いま阪神電車の駅には、阪神間の文学案内パンフレットのようなものが置いてあって、沿線に散らばっている村上春樹の作品ゆかりの場所がちゃんと説明されています。今日もお帰りの際にご覧いただきたいと思いますが、夙川オアシスロードをずっと海の方へ歩いていかれると、『ランゲルハンス島の午後』のエッセーに描かれた小さい橋などゆかりの場所があります。

今日はいろいろ音楽がらみでお話をしていますが、これはコロッケ屋さんです。水野家のコロッケをお好きな方はいらっしゃるかなと思います。関西でコロッケといえば水野家のコロッケかなみたいな感じです。これは東灘区の水道筋商店街です。どうも水道筋商店街で村上春樹が高校生のころに出没したらしいということを聞いたことがあって、わざわざ調べに行きました。神戸高校から放課後ずっと王子公園の方へ坂を下りてきて、水道筋商店街へ行きあたります。どうも水野家のコロッケを買って食いながら、三宮の高架下へレコードをあさりに行ったんじゃないかということが言われています。高校のときの関係者の方から聞いた話です。水野家のコロッケも実はゆかりの場所だったりします。いまの水野家のコロッケのところから商店街の入口の方を歩いて坂を上っていくと、神戸高校の方へ上がっていくことができます。

高校時代の村上春樹さんが一生懸命レコード屋さんをはしごしながら、いろんなジャズとクラシックのレコードを集めて聴いていたというあたりのところへ話を戻したいと思います。これはベートーベンですが、ベートーベンの曲をかけていただけますでしょうか。ディスク3です。

(音楽)

曲名：ベートーヴェン作曲『ピアノ協奏曲第3番』

演奏：グレン・グールド(ピアノ) レナード・バーンスタイン指揮 コロンビア交響楽団

ちょっとスピーカーが近い方はうるさくて申し訳ありません。これはベートーベンの『ピアノ協奏曲第3番』でグレン・グールドがピアノを弾いています。

なかなかピアノが出てこないのですが、グレン・グールドのピアノをちょっとだけ聞いていただきますよう。

それではフェードアウトしてください。

こんな感じの『ピアノ協奏曲第3番』です。これは『風の歌を聴け』のなかに出てきますので、お読みになった方は、多分覚えていらっしゃると思います。非常に印象的に小道具として使われています。

『風の歌を聴け』の語り手の僕が、ジェイズ・バーで酔っ払った女の子を介抱してお家へ送っていったら誤解されて、ひどいことを言われたと。そのあとたまたまレコード屋に入ったら、その女の子がアルバイトをしていて、またひどいことを言われて散々な目に遭います。

そのレコード屋さんは、映画の『風の歌を聴け』では元町の商店街のレコード屋さん、楽器屋さんになっていましたが、原作ではべつにどこのレコード屋とは書いていませんでした。下心があって酔っ払ったのを連れて帰ったと思われて、誤解されたまま非常に気まずい感じでその店で顔を合わせてしまいますが、そこでレコードを選びます。その選んだレコードのなかの1曲がピアノコンチェルトです。

ここが面白いんですが、怒っている店員の女の子はベートーベンの『ピアノコンチェルト第3番』を2枚持ってきます。グレン・グールドとバックハウスのどっちがいいかと。僕が、グレン・グールドとすぐ選ぶところが非常に面白いです。先ほど、グレン・グールドの『ピアノコンチェルト第3番』を聴いてもらいましたが、グレン・グールドは、ものすごくファンの多いピアニストです。生演奏が嫌で、録音でしか音楽をやらなくなってしまような非常にマニャックなところのある、非常に孤高のピアニストです。

村上春樹の『風の歌を聴け』のなかで、グレン・グールドのベートーベンの『ピアノコンチェルト第3番』が選ばれているのがなぜ面白いかというと、その楽屋話が実は最近明らかになったんですね。どうやら11月の末か12月に、村上春樹さんが小澤征爾をインタビューした二人の対談本が出ます。(※『小澤征爾さんと、音楽について話をする』小澤 征

爾 (著)村上 春樹 (著) 新潮社 2011 年)

それはたまたま僕が雑誌で見つけた記事に、小澤征爾を村上春樹がインタビューしたという夢のカップリングみたいなものがありました。今年のわりと新しい雑誌です。つまり村上春樹と小澤征爾の対談は、当然音楽の話で盛り上がっているわけです。ベートーベンの『ピアノコンチェルトの第3番』を一緒に聞きながら、インタビューをしているところがあります。グレン・グールドの弾いたものとほかを比べて、聞き比べみたいなことをしています。小澤征爾さんは専門家の立場からそれを語り、村上春樹さんは、当時グレン・グールドの弾いた『ピアノコンチェルト第3番』を聞いて好きだったみたいなことを言っています。村上春樹さんが『風の歌を聴け』のなかでこれを使っているのは、何を隠そう自分の好きなレコードだったんですね。そういう楽屋ねたみたいなことがぼろぼろ出てくるのが面白いです。

しかし、グレン・グールドというピアニストを選ぶあたりがちょっと通ですね。高校生のころレコード屋さんへ行って自分で買ったんだろと思いますが。普通だったらバックハウスの方を買うと思います。特にクラシックレコードを集め始めましたぐらいの感じであれば、ベートーベンであればやっぱりドイツ人かなみたいな感じで、ドイツの代表的なピアニストであるバックハウスを選んだかもしれません。それをグレン・グールドとバーンスタインのレコードを選んで買っているところが、村上春樹の通好みなところがすでに現れていると思います。

先ほどのグレン・グールドとバーンスタインのレコードは、『ノルウェイの森』のなかにもおそらく出てきます。早稲田大学のキャンパスで、女学生がレナード・バーンスタインのレコードを抱えているという描写がぼろっと出てきます。それはグレン・グールドのレコードかどうかは分かりませんが、なんとなくそんな気がします。

では、レコードを自分で集めて聞き始めたマニアックな音楽少年になりつつあった村上春樹ですが、それだけだったら全国にいくらでもそういう少年はいたと思います。音楽好きの少年というのは、自分で好きな曲を一生懸命聞き込んで、だんだん自分の音楽の世界を広げていくものなので、全国にいくらでもそういう少年はいたと思います。

でも村上春樹の場合、幸いだったのは、当時、阪神間に住んでいたということなんです。これは一つの例として出しましたが、阪神間の音楽体験というのは東京、大阪に次ぐ、あるいは東京、大阪をある意味ではしのぐような特殊な充実した環境であったように思います。

例えば、野外ライブがわりと頻繁に行われていたらしいです。らしいというのは、僕はほんの子どもころにちらちらと知ったぐらいですので、当時どうだったかというのは実は聞いた話でしかありません。

「四大ドラマー世紀の共演」とはいったい何かと思うと、これが村上春樹さんのエッセーのなかに紹介されています。調べてみると、先ほどのアート・ブレイキーが中心になって四人のドラム奏者が共演している CD があつたりします。当時、西宮球場を舞台に生に

近いものを聴けたということは、なかなか貴重なことです。

ご存知のように西宮球場は、いまは西宮ガーデンズに変わってしまいました。西宮ガーデンズに行くと、西宮球場のアーカイブみたいなものがあって、西宮球場の復元模型が飾ってあります。私自身の個人的体験のなかでの西宮球場というのは、僕が小学校のころは阪急ブレーブスでした。今日、監督がお亡くなりになった記事が出ていましたが。

西宮球場は阪急ブレーブスの試合をやっていたと同時に、右下に写真を載せているように、吹奏楽の祭典も行われる場所でした。3千人の吹奏楽となっていますが、僕が中学生だったころは、2千人の吹奏楽という名前でやっておりました。残念ながら、所属していた中学校の吹奏楽部は出場するほどうまくなかったんですが、みんなで聴きにいったことを覚えています。ずっと長く続いている吹奏楽のイベントです。

このように西宮球場、甲子園球場、西宮市にある球場を使ったライブイベントは、昔々からあったようです。非常に特殊な音楽的文化の伝統もあります。そして、あとで紹介しますが、大澤壽人さんも出演していた西宮球場でのたそがれコンサートもありました。芸術文化センターで大澤壽人の特集展をやっていたときに、このポスターが展示されました。野外演奏のライブの特殊な、独特なものも行われるぐらい音楽文化というものが幅広く浸透していました。

残念ながら、村上春樹さんが西宮球場にどのぐらいライブを聴きにいったかは、はっきりとは書かれていません。聴きにいったいかもしれないかもしれません。でも、そういうライブをやっていたことは知っていたようです。村上春樹のエッセーのなかに、面白おかしく引用されています。

『遠い太鼓』という村上春樹さんがギリシャに住んでいたときの紀行エッセーですが、ギリシャのエーゲ海の島で嵐に遭って、ずっと雷が鳴り続けるんだと。雷の音がずっと続くことが、西宮球場の四大ドラマー世紀の対決に匹敵するぐらいしつこくてうるさかったみたいなコミカルなところに引用されていて面白いです。ということで、そういうライブがあったということを知っているということが分かります。実際に聴きにいったかどうかは分かりません。阪神間の音楽文化の何か幅広くて奥深いところから、いろんなものをくみ上げていっている村上春樹少年の姿が何となく思い浮かぶわけです。

突然こういうものを出しましたが、これをお聞かせしたかったんです。この原始的な、CDを入れ替えていると昔を思い出しますが。

(音楽)

曲名：バルトーク作曲『弦楽四重奏曲第1番』

演奏：ヴェーグ弦楽四重奏団

突然しみりとした音楽が流れてきましたが、バルトークという作曲家の『弦楽四重奏曲第1番』です。ヴェーグ弦楽四重奏団という弦楽四重奏のCDです。

なぜこれを流しているかという、母校の神戸高校を取材したときに、対外関係の窓口になっていた先生から、村上春樹が神戸高校時代に書いたといわれる新聞委員会の学校新聞の記事を見せていただきました。

ヴェーグ弦楽四重奏団を聞いた鑑賞記です。これは高校生のとき、村上春樹さんが学校新聞に書いた記事で、このときはマニアックなバルトークのカルテットの演奏会ではなく、ベートーベンの弦楽四重奏曲をコンサートでやったものを村上春樹が聴いたということになっています。

バルトークの曲はここで止めますね。

かなり耳が肥えていたということは、それだけでも分かります。だいたい弦楽四重奏というのは、クラシックの曲のなかでも通のなかの通好みのジャンルです。ご自分でバイオリンやチェロとか弦楽器をやっている方は、そういう弦楽四重奏を聞いてうんすごいと思われるのかもしれませんが。

はっきりいって僕も管楽器やコーラスをやっていましたが、弦楽器にわりと疎いので、弦楽四重奏曲というのはやっぱりものによってはいい子守唄になってしまうようなところがあります。ベートーベンの弦楽四重奏を聴いていても、何となく心地よくまぶたが重くなってしまう。でも、クラシックのものすごく好きな方に言わせると、クラシックを鑑賞する究極のものは弦楽四重奏だといいます。弦楽四重奏には、クラシック音楽のエッセンスが凝縮されているところがあるらしいです。

多分、高校生の男の子が弦楽四重奏団の演奏会を聴きにいった、その音楽評を書けるということはなかなかないと思います。そういう一つの例を見ても、村上春樹少年がいかに肥えた耳を当時から持っていたかというのはおそらく明らかだろうと思います。

当時の村上春樹少年、高校生だったころの彼の優れた鑑賞力は、実に注目に値するなと思います。

阪神間で、10代のころにずっと音楽体験を積むということの意味が、おそらく何かはたらかけているんだと思います。ご存知だと思いますが、阪神間の大正から昭和にかけてのブルジョア文化の成熟は、ほかに例を見ないものがありました。それが文学の面であれ、絵画であれ、音楽であれ、いろんなところに花開いていきます。

もちろん村上春樹自身は、そういう昭和初期までのブルジョア文化を受けて育ったわけではありません。完全に戦後です。でも、その名残を吸収して育ってきたのではないかといえます。そのいくつかの例は、誕生日のプレゼントにアート・ブレイキーのライブチケットをもらったことでしょう。

これは有名な話ですが、村上春樹のお父さんは高校の国語の先生で、本をツケで買っているとか、先ほどのヴェーグ弦楽四重奏団の演奏会の批評を書くとかね。明らかにほかとちよつと違いますよね。ほかの高校生たちとは、かなり音楽に対する深さが違います。僕

自身、生まれてもいなかったころのことを語るのもなんですが、村上春樹の小説のなかには、文体や描写、扱っている題材などいろんなところに阪神間の空気感が散りばめられています。

これは香櫨園海水浴場の写真です。ちょっと前に西宮ガーデンズで昔の西宮の写真展があって、そこで撮らせていただきました。僕は全然知りませんが、ここから夙川をずっと下った香櫨園の海岸は、昔、海水浴場でした。村上春樹が子どものころは、まだこの海水浴場で泳いだそうです。僕は全然知りません。村上春樹は、ぎりぎり阪神間が昔ながらの阪神間であったころを知っています。これは現在の御前浜です。西宮の香櫨園から端っこのウインドサーフィンとかやっている方です。海岸は残してありますが、当時の海水浴場の面影はありません。なかなか御前浜で泳ごうかなという気にはならないですが、村上春樹が子どものころは泳げました。

この写真も同じく西宮ガーデンズにもありました。夙川の河口付近で水遊びをしていたものです。昭和43年の写真ということです。村上春樹も川遊びをしたと書いていますので、この写真に写っているかは分かりませんが、そういう感じだったんだなということは分かります。

これは現在の御前浜からちょっと上がったところの道筋です。すでに防波堤が固められています。海岸道路沿いの松の並木は、当時のものだということです。本当でしょうか。一応、松並木だけ残したそうです。

御前浜に写真を撮りにいったとき、車で行って写真を撮っていたんですが、すぐ近くにお巡りさんが来て駐車禁止を切っていました。僕の車はちょっと前に止めていたので、慌てて駐車禁止を切られる前に逃げたという、どうでもいいような写真です。最近では文学のフィールドワークも世知辛くて、中学校の校門を撮っていたら警備員が来るし、車を駐めていたらすぐ駐車禁止を切られるし、本当に大変です。

ついでですが、ボーリング発祥の地という面白いものを見つけました。これは神戸の三宮の東遊園地にありました。阪神間から神戸にかけて西洋文化の窓口だったということは周知のことです。

これは有名な甲子園ホテル跡で、現在の甲子園会館の大きな広間です。これは村上春樹がらみのイベントをしたときに僕が写真を撮りました。阪神間の昭和初期までのブルジョア文化の名残です。そういうなかから、例えば有名などころでは、貴志康一という人が出てきたわけです。

これは少し演奏を聴いていただこうと思います。貴志康一さんをご存知だと思いますが、日本人でベルリンフィルハーモニー管弦楽団を指揮して、自作の曲を戦前にベルリンフィルハーモニー管弦楽団でレコーディングしていた天才的な音楽家です。この人は阪神間を代表する音楽家の一人です。ディスク4を聞いていただきましょう。

(音楽)

曲名：貴志康一作曲『日本組曲』より『道頓堀』

演奏：ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

SPレコードを復刻しているので、ぱちぱちというノイズが入っています。いまから聞いてもすごく上手です。上手という失礼ですが、さすが天下のベルリンフィルハーモニー管弦楽団という感じです。

これは、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団を指揮している貴志康一の写真だそうです。

これでフェードアウトしてください。

貴志康一作曲の『日本組曲』という曲のなかに、『道頓堀』という曲があります。それをいま流してみました。1934年録音でだいぶ古いものです。もちろん戦前のSPレコードですが、こうしてちゃんと復刻されて聴くことができます。

いまは道頓堀といえば、やっぱりくいだおれ人形になってしまいますね。明日は大阪府知事選挙ですよ。大阪市長選と大阪府知事選ですが、僕が大阪市長か大阪府知事になるとしたら、道頓堀はやっぱりくいだおれよりも貴志康一の『道頓堀』の曲を一押ししたいところです。多分、知らないですね。大阪人でも戦前のベルリンフィルハーモニー管弦楽団で『道頓堀』の曲が演奏されているなんて、あんまり知らないんじゃないかなと思います。

貴志康一さんは阪神間の音楽文化を代表する方ですが、残念ながら若くして亡くなってしまいます。ゆかりがあった甲南学園に資料室が準備されていると聞きますが、知名度の点では、まだ日本人が誰でも知っているというわけにはいきません。ものすごくたくさん曲をつくって、自らベルリンフィルハーモニー管弦楽団を指揮してレコードに入れています。

ベルリンフィルハーモニー管弦楽団といえば、ご存知のように西宮ゆかりの芸術文化センターの音楽監督の佐渡裕さんが、このあいだベルリンフィルハーモニー管弦楽団の指揮をしてもものすごく話題になりました。佐渡裕のベルリンフィルハーモニー管弦楽団の何とかとって、たちまちCDも出るし、テレビもやりました。ものすごく話題になりました。ああいうふうには話題になることは、いいことだと思います。

しかし、佐渡裕さんの前にも、ヨーロッパのあるいはアメリカのオーケストラを指揮している日本人はたくさんいます。もちろん小澤征爾さんもその一人です。久しぶりに日本人の指揮者がベルリンフィルハーモニー管弦楽団を指揮したから、あんなに話題になったのだろうかと思います。佐渡裕さんのニュースを見ながら、それを紹介するときに、例えば、日本人で初めてベルリンフィルハーモニー管弦楽団を指揮した貴志康一とか、ちらっとひとことでも紹介したらいいのになと思ったりしました。まるで、佐渡裕さんが初めて指揮したみたいな感じです。小澤征爾さんもベルリンフィルハーモニー管弦楽団を指揮していたわけで。そんなふうにはちらっと思ったりもしました。

時間がだんだんなくなってきました。大澤壽人さんも有名な阪神間を代表する音楽家の

一人で、双璧です。貴志康一と大澤壽人という感じで双璧になると思います。これも戦前のヨーロッパで、まずアメリカへ留学して、パリへ行きました。向こうで名を上げた作曲家であり、指揮者であります。

『ピアノ協奏曲第3番神風交響曲』というのは、いわゆる神風特攻機の神風ではありません。下に写真を出しているように、戦前の神風号という飛行機の名前です。これがずっと飛行記録に挑戦しながら飛んでいるときに、伊丹へ来たそうです。伊丹へ来た朝日新聞がらみの神風号という飛行機の題名を付けてピアノ協奏曲を書いているあたりが、時代を感じさせます。昭和初期のまさにモダニズムの時代という感じです。ちょこっとだけ聞いてみましょう。ディスクの5です。

(音楽)

曲名：大澤壽人作曲『ピアノ協奏曲第3番「神風協奏曲」』

演奏：エカテリーナ・サランツェヴァ（ピアノ）　ドミトリ・ヤブロンスキー指揮　ロシア・フィルハーモニー管弦楽団

これは現代の演奏ですので、録音は新しいです。これはさっきのベートーベンと違って、いきなりピアノがじゃんじゃか弾き始めます。これは、まるで近代フランス音楽のようなモダンな響きです。

これも時間がないのでフェードアウトします。

それもそのはずで、大澤壽人さんは最初ボストンで勉強して、そのあとパリで有名な、いわゆる日本人の大好きな印象派全盛期の作曲を学んでいます。当時の日本人にしては新しすぎたという悲しい話です。大澤壽人さんの曲は、戦前は斬新すぎて日本人には理解しにくかったといわれています。ボストン交響楽団で、日本人で初めて指揮したとなっています。当然のことながら、のちに小澤征爾さんがボストン交響楽団の音楽監督になる先駆けでありました。

これは、最初に紹介した小澤征爾さんの『シンフォニエッタ』のCDのジャケットです。まだ若かったころの小澤征爾です。髪の毛も黒くて、いまの鬼気迫るような小澤征爾さんとはかなり違います。小澤征爾さんも若いころのいろんなレコードは、独特の輝き、勢いがありました。『シンフォニエッタ』にしてみても、やっぱり聴き応えがあると思います。

阪神間の音楽文化はずっと下地があって、その上に村上春樹が乗っかってきたということをもう少し筋道を立ててお話したかったのですが、余計な話をしすぎて時間がなくなってしまいました。

要するに、阪神間には、西宮であれ、芦屋であれ、音楽をずっと育ててきた地盤があります。ラジオ一つ取っても、電話リクエストをずっと村上春樹は聞いて育ちましたが、そういうのも音楽が好きな下地、風土があったということです。村上春樹が好んで三宮の高架下のレコード屋さんをはしごして回ったということも、やっぱり音楽を愛好するすそ野

があつてのことです。そういうなかで、自分でこつこつお小遣いを貯めてレコードを買って耳を肥やしてきた村上春樹という人が、のちに文学のかたちでいまのように花開くというのは不思議なことでもあり、またそういう音楽的な部分から村上春樹の小説を読んでいく面白さみたいなものがあります。

最後に、僕がちらっとさっき言いました幻のノーベル文学賞コメントですが、何を言ったかという、もし村上春樹がノーベル文学賞を取ったとします。僕としては、新聞にこう言いました。

「これはある意味当然のことです。まず、日本人の文化の代表選手として小澤征爾の CD が、世界中の CD ショップに並びました。10年、20年遅れてやっと文学がそれに追いつき、村上春樹の本が世界中の本屋さんに並ぶようになった。」

こういう小澤征爾のからみでコメントを言いましたが、残念ながら流れてしまいました。今日はいろいろご紹介した曲も村上春樹の本を読みながら聞いていただけると、違う楽しみ方ができると思います。

このぐらいで終わろうかと思えます。明かりをつけていただけますでしょうか。では、ご清聴ありがとうございました。いろいろ不手際があつてすみませんでした。

河内:今日はこのシリーズの最終回です。この企画を去年から立てています河内厚郎です。去年の秋から始めて、今年の春、それからこれが3回目です。できれば続けたいと思っています。それには西宮文化振興財団さんと相談しなければなりません、西宮は本当に宝の山というか、知らないことがまだまだいっぱいあります。先ほどの大澤壽人という人は、関西学院大学の出身で甲東園に住んでいました。神戸女学院で教えたりもしていました。宝塚歌劇の作曲もして、映画音楽の作曲もずいぶんしています。息子さんがまだ大谷町にお住まいで、資料をたくさん持っていらっしゃいます。最近、ようやく CD がどんどん出始めまして、すごい人だなと分かってきました。西宮北口の芸術文化センターでも大澤壽人を取り上げました。貴志康一さんはもっと親しみやすい曲を書かれた人です。一昨年が生誕100年です。1909年生まれで1937年に28歳で亡くなっています。ベルリンフィルハーモニー管弦楽団を指揮したと。そういう意味で非常に惜しまれました。そういう歴史をどんどん発掘したいと思えます。

最近、見ていますと、西宮球場と甲子園球場はずいぶんコンサートが行われていました。一番面白かったのは、昭和31年、昭和32年に甲子園球場でオペラの『アイダ』をやっています。エチオピアから凱旋シーンがあるので、阪神パークからゾウを連れてきて舞台に出しています。いまならずごく規制がうるさいですね。演出は武智鉄二です。歌舞伎の演出家で、のちに妙な映画をいっぱいつくりました。古典芸能で有名な演出家です。武智さんは当時芦屋に住んでいました。朝比奈さんがよく西宮球場でたそがれコンサートをやっていたので、そういう下地はかなりあったと思います。

ちょっと嫌味を言ってよろしいですか。ここは村上春樹が子どものときに親しんだ図書館

ではありません。今日のご厚意でここを使わせていただいて良かったんですが。彼が行ったのは六ヶ寺町の市役所の横にあったスパニッシュコロニアル風の図書館でした。それはもうありませんので、土居さんの講演の会場をどこにしようかと思っていたところ、なんと香櫨園小学校、村上春樹の母校の校長先生から、ぜひ香櫨園小学校を使ったらどうかと申し出ていただきました。ところが西宮市教育委員会からストップがかかってしまったんです。つまり、学校は地域住民には開放していいと。しかし、市外から人が来たら困るということです。いけませんね、教育委員の方は。こっそり広めてくださいね。こんなことを言っていると来年できなくなってしまうが。

本当にまだまだやりたいことがたくさんあります。そういう意味で、ぜひ文化サロンを来年もやらせていただきたいと思います。よろしくお願ひします。来年のNHK大河ドラマは平清盛ですが、平清盛と阪神間のかかわりも発掘してみたい気もします。やりたいことはいっぱいあります。土居さんもすでにいろんなことを頭に思い描いておられるということです。準備できていますね。来年もよろしくお願ひします。ありがとうございました。

(終了)